
コンビニロマン

久住なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニロマン

【Nコード】

N2870S

【作者名】

久住なつき

【あらすじ】

高校生の頃、コンビニのお兄さんが好きだった。

「今では『脳の奥の奥の、普段は全く思い出さないもの』の場所へ」

コンビニなんていくらでもある。

最寄りの駅周り、家までの道のりを合わせると実に多すぎる選択肢。しかしどういふ訳かいつも使うコンビニはだいたい決まっていたりする。

それには人間の消費行動の心理もあるけれども
もつと明確な理由で私の使うコンビニは決まっていた

私のような経験をしたことある人、している人、結構多いんじゃないかと思う。

誰もが一度は憧れるシチュエーション。

高校生の頃、コンビニのお兄さんが好きだった。

一目惚れほど劇的では無かったけれど、「ちよつとかつこ良いな」がコンビニに行く度に積もり、いるかなって期待するようになってレジに並ぶときにドキドキするようになって、簡単に片想いは完成した。

「毎日同じもの買って覚えてもらえば？」という友達の言葉を真面目に実践し、

大学受験の夏休みなんてお昼ごはんは毎日コンビニのご飯と1本95円の豆乳という生活だった。

並ぶだけでドキドキなもんだから顔なんて見れなくて、目のやり場に迷いネームプレートを見つめる。
名前もちやつかり確認。

（宗谷さん。宗谷さん。かつこいいー！）

しかし思いを告げることも、むしろ話しかけることすら出来ずに夏は終わった。

校則の厳しい高校のせいにする訳では無いけれどいまいちな黒髪ヘアに眼鏡、自分の見た目に自信なんて無い。

そして夏休み明けの模試の結果に、熱に浮かされていた頭の方も冷めてきたのか、

学校と塾の往復に精を出し始めた。それから驚くほどあっという間に時間は流れ、私は大学生になっていた。

新しい生活に追われそれを満喫し、コンビニも第一線はとづくに駅に一番近い場所に変わり

あんなに通っていた某コンビニはたまにふらつと寄る場所になった。そして宗谷さんは脳の奥の奥の、“普段は全く思い出しもしないもの”の場所へ。

顔ももうおぼろげだけど、名前だけは脳に残っている。そんな程度。だから油断していたんだ。

大学生になって初めての夏休みにふらつとそのコンビニに入ってるくに顔も見ずにレジへ。目に入ったネームプレートに“宗谷”の文字。

ちらつと顔を盗み見る。あくまでさり気なく。いやらしい程度に。

（やっぱりかっこいいな）

それは雰囲気だと言われてしまうかもしれないけれど。高校生の自分が憧れていた人。やっぱりかっこいい。

黒髪で色白でかっこいい。それに対して。それに対してだ。

明るい茶髪でパーマもかけたけど、今日に限ってすっぴんでだらしがないジャージで頭のぼさぼさの自分。

（まあまあおしゃれになっただけど、今日のこの格好じゃね。まあ昔の思い出の人だしもう良いけどさ）

ちなみに豆乳は買ってない。飲みすぎて嫌いになっていた。

思い出という程何も無かった思い出のため、コンビニのバイトに憧れていたのだけれど

時給や時間の都合で選んだバイトは居酒屋。

力も頭も人並みな私の取り柄は若さと女の子であることと笑顔。ま

あそれも人並みなんだけど。

「ご注文お伺いしまーす」

何も面白くなくても、男女の集団客にも、笑顔で接客。

そうすると楽しい気分になってくるから不思議。

そしてまた不思議なことに仕事の時つて変に大胆になれるもので
つかつか良い人をニコニコしながらガン見してしまう。

男女混合グループだけど、黒いＴシャツに綺麗な鼻の横顔の男性が
妙にツボった。

注文を受けながらその人をニコニコ見ていたら

何だか思い込みでなく普通のお客さんよりよく目が合うし、ちよつ
とだけ浮かれてしまう。

「かしこまりました失礼致しまーす」

そう行つて座敷の団体席を離れ、所定の位置へ戻る。

空いている日だったので待機という名の立ち尽くし。

しばらくするとラッキーなことに、さっきの黒いＴシャツの男性が
トイレに行こうとこつちに向かつてきた。

会釈でもしちゃおっかななんて一人うきうき考えていたら

黒いＴシャツの男性からぎこちなくぺこりと頭を下げられた。

店内は暗い。だから顔はおぼろげだけだ。

翌日、私は軽く化粧とちょうど良い気合具合の服装をして、コンビニへ。

レジを見た瞬間に心拍数が上がつて、別のことに意識を持っていか
れながらお菓子を選んで目的のレジへ。

呼吸の仕方を度忘れしそうになりながらレジに商を置く。

私の期待と裏腹に、目を合わせられることもなく商品にバーコード

のマシーンが。

（あ、違ったんだ）

胸がしぼんだ。そう頭が思う寸前で

「昨日はご馳走様でした」

ニコって音が聞こえそうな笑顔と

このシチュエーションで最高にスマートな言葉。

何か始まると期待しても良いですか。豆乳はココア味がおすすめで
す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2870s/>

コンビニロマン

2011年10月3日01時32分発行